

学生の現在——サークルでは

インカレ・サークル

小瀬 輝夫

学生課の業務のうち、クラブ・サークル関係業務の占める比重はかなり大きいものがあります。例えば、私が勤務する名城大学の場合、学生課所管の予算を見ると約四五%が直接的にクラブ・サークルに関わるもので、間接的

に関わるものを加えると六〇%を超えるのではないかと思われれます。

しかしながら、愛知私大教連が行った「学生の意識・生活実態調査」等でも明らかのように、学生自治会活動を含めた学内の課外活動に参加している学生は意外に少ないものです。名城大学でも一九九〇年秋に実施した調査によると、学内のクラブ・サークルに参加している学生の割合は、約四二%であるとの結果が出ています。

では、残りの約五八%の学生は授業以外の時間をどのように過ごしているのでしょうか。調査結果がないので正確には分かりませんが、アルバイト、Wスクール、真つ直ぐ帰宅、等々が考えられますが、学外でのサークル活動（複数の大学の学生で組織されたインターカレッジのサークル、以下「インカレサークル」という）に精を出す学生もみられ、かなりの層として存在してい

るようです。先に紹介した名城大学の調査では、約七%の学生が参加している（私の実感ではもっと多いと思われる）ことが明らかになっています。

□ □

インカレサークルについては、かなり以前から存在していたようで、その多くはスキーツアーやパーティなどいわゆる「遊び」の各種イベントを企画し開催することを目的としています。

（イベント屋と言う人もある）現在名古屋地区にあるインカレサークルは、百団体とも数百団体ともいわれており、かなりの歴史を持つものもあれば、誕生してすぐ消滅してしまうものもあります。また、サークルを構成する学生も、中心となつている学生を除くと必ずしも明確ではなく、学内のクラブ・サークルなどと比較すると結束力や拘束力などは比較的薄いようです。

これらのインカレサークルは、数年

前から連合体を結成する動きがあります。ある連合体は、五年前くらいに結成され、約三十サークルで末端会員が約六千人の規模を持っており、現在では機関誌も発行しています。この連合体は、昨年夏に知多半島の海岸で千人規模のイベントも成功させています。

先日、このようなインカレサークルの中心メンバーの話しを聞く機会がありました。彼らは、大学内の既存のクラブ・サークルは型にはまった活動スタイルとなつているため敬遠しがちです。インカレサークルの場合は、拘束力もそれほどではなく、人間関係も緩やかで、年間を通して多種多様な活動ができることに魅力を感じているようです。また、主として「遊び」のイベントではあるものの、それを企画し実行する過程では苦勞することもあり（例えば、企業が協賛という形で資金提供している場合が多く、協賛を得る

ための企業回りで社会勉強もしている）、大学内ではできないような経験を積んで、かなりの充実感を味わつています。いろいろな大学の学生をはじめとした人脈形成にも魅力があり、また財産となつているとのことでした。

□ □

一方、彼らの本拠地である大学内には友人が少なく、講義に出ても話す相手もあまりないという状況で、学内で過ごす時間も少ないようです。まさに、大学は単位を取る（卒業する）だけの生活の場であり、大学生活そのものの本拠地にはなっていないのです。

ひるがえって、各種学生サービスの本務とする学生課は、アルバイトに専念する学生や直ぐ帰宅する学生を含めて、五八%の学生にながでできるのか、大学に居つかない学生にどのようなサービスを提供すればよいのか、彼らは大学に何を期待し、どのような

サービスを求めているのか。

「アンケートをしたら」の声もありますが、多くの場合彼らは声なき民として存在しており、もともと大学にそれほど期待していない（従って要求もない）側面を持っているものと思われる、なかなか妙案が出てこない状況です。

（名城大学・学生課）